

Autobiographie de Rencontres Interculturelles

を用いた異文化間学習

大山 万容

OYAMA Mayo

Université de Kyoto

mayom2011@hotmail.com

1. はじめに

本稿は、欧州評議会の提供している異文化間教材である *Autobiographie de Rencontres Interculturelles* (『異文化間の出会いのための自伝』: 以下『自伝』とする) について、それが要請された背景と学びのための理論的根拠を検討し、これが言語教育を通じた社会的統合という目的を持つ教材であることを明らかにする。そしてこの目的を共有するような、日本におけるフランス語教育への導入の意義について考察する。

2. 『自伝』の構成

『自伝』は、成人用と若者用から成るが、いずれも、学習者が過去に経験したある一つの異文化間の出会いに焦点を当て、用意された質問に答えられる範囲で記述していくという構成を持つ。成人用に関して言えば、一連の質問とは、次のようなものである。

1. どんな出来事であったかを具体的に書く。どこで、いつ、どのような文脈で起こったことか。
2. その出来事の中で、相手について気が付いたことは何か。
3. その当時の自分自身の感情は、どのようなものであったか。
4. その当時の相手の感情は、どのようなものであったと思われるか。
5. 自分の感じ方と、相手の感じ方について、同じところと違うところは何か。
6. 相手とコミュニケーションするとき、自分の話し方や書き方について、気を付けたことは何か。
7. その出来事の中で困惑させられた事について、自分自身の発見があったか。
8. 他の集団や文化に属するものを、自分の集団や文化に属するものと比較するとどうか。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

9. もう一度出来事を振り返ってみて、その経験についてまとめると、どのようになるか。

ここで異文化間の出会いというとき、その場所は問われない。文化は、エスニック集団、宗教、言語的差異、人種的差異、地域的差異、国籍、超国家共同体（EU など）の内外といったきわめて多様な切り口から捉えられている。このような意味での異文化間の出会いは、均質性が高いと言われる日本の中においても決して特別なものではなく、むしろ日常的に見られうるものである。

3. 理論的背景

この教材は、なぜ自伝の形を取っているのだろうか。その理論的背景としては、次が挙げられる。まず、特別で「まれ」な出来事は、それを体験した人の人生に長い期間にわたって影響を与えやすい。ある異文化との一回性の出来事に焦点を当てた記述は、異文化に対する一般化を避けるためにも、自らの印象に残った体験から学びを進められるという点においても、有用なのである。さらに、また自分の体験、とりわけまれな体験について、書く事を通して考える時には、ただ白紙に向かって書きつけるよりも、自らの振り返りを助けるようなツールがあると、より意味のある省察が得られやすいと考えられる。そのように内省を助けるツールとして『自伝』は開発された。

4. 『自伝』による学習の目標

何を目標に『自伝』を用いるかは、文脈によって異なってくる。学習者が自らの異文化能力を振り返るための自己評価として用いるケースや、教育の場で教師が教育／学習を目的として使用する場合もありうる。いずれにしても、異文化に出会うことは日常的に起こりうることを踏まえ、自らの体験を振り返ることによる学習が、未来の異文化間接触に役立つと想定されている。

5. 教師の役割

『自伝』を教育の場で使う場合には、教師が必要である。『自伝』では、教師が、生徒の望まない閲覧、採点はしないこととされている。これは、『自伝』が何らかのスキルを身につけるためのものではなく、内省に誘うことで、全体的な異文化間能力を発達させること目標としているためである。ここで異文化間能力とは、そもそも定量的な評価になじまないものと捉えられている。このために『自伝』では、教師自身が教える側としてよりも、メンターとして接することの重要性を論じ、また生徒同士がメンターとなれる機会づくりとすることも重要であると指摘しているのである。教師も学習者自身も、他の学習者の自省をフォローする役割に立つということである。

6. 複言語能力と異文化間能力の違い

欧州評議会には既に *European Language Portfolio* 『ヨーロッパ言語ポートフォリオ』という記述式の資料も開発している。これは個々人の学習の動機づけを高めるのと同時に、複言語能力の証明のために使用することを目的として開発されている。このように、『ヨーロッパ言語ポートフォリオ』が「人に見せる」ことを目的にした

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

ものであるのに対して、『自伝』は、学習者が自分で考えることを助けることを目的にしたものであるという違いがある。

欧州評議会は、民主的市民性の重要な要素として、複言語能力と異文化間能力の育成を提言してきている。複言語能力とは、個人の中に様々な言語能力が共存しており、それを適宜活用することの出来る状態を指す。また異文化間能力とは、そのような多言語環境を前提としたなかで、異文化間の出会いに対してよく理解し、共感し、かつ行動できるような能力を指す。

ここで、複言語能力と異文化間能力の能力観の違いについて述べておきたい。複言語能力は生涯にわたって発達したり、場合によっては減少したりするものの、基本的には「累積的な」イメージで捉えられるものである。これに対して異文化間能力は、言語能力のアナロジーで、累積的に進歩していくものとしては捉えられていない。数多くの異文化に出会った人ほど、より異文化間の出会いに必要な能力を発達させていることは、ありうるかもしれないが、必ずしも自明ではない。つまり異文化間の出会いによる変化は、直線的には捉えられないのである。

7. 『自伝』による学習の目的：複層的アイデンティティの承認

ではなぜこのような内省が必要なのであろうか。ここには、『白書』と『自伝』でも強調されているように、複層的なアイデンティティを認めることが関わっている。近代国民国家では、一つの言語、一つの文化、一つの国民、一つの国家というモデルが理想とされてきた。しかし、現実には、過去も現在も、個人は常に複数の集団に基づいて自己認識をしており、文脈によって様々なアイデンティティを突出させるものである。欧州の異文化間研究において「複層的アイデンティティ」というときには、このような事実をはっきり認識するという意味が込められている。

このようなアイデンティティは、「差異」に直面したときに、その成り立ちを顕在化しやすくなる。このため、異文化間の出会いについて省察することが、自らのアイデンティティの成り立ちを内省する好機となると考えられているのである。さらには、異文化間接触を通して、相手側の所属集団への態度だけでなく、自己の所属集団への態度も変化させるという、一方的な理解ではなく、文化変容を含んだ異文化間能力が想定されているのである。

『自伝』が理想とする社会では、社会においても、個人の内部においても、個人の複層的アイデンティティを積極的に認め、また個々人の持つ文化観を相対化するだけではなく、批判的に検討する力を含む、動的なモデルが想定されている。

8. 異文化間能力のモデル

異文化間に関する能力は、「知識・スキル」、「行動」、「態度・感情」そして「行為」という4つの次元から捉えられている。それぞれ、具体的には次のようなことを指す。

態度・感情

- ・ 他者のアイデンティティを承認すること：他者がどのように異なったアイデンティティを持っているかに気が付き、その価値や洞察を受け入れること
- ・ 他者性の尊重：他者に興味を示し、何が前提とされ何が「普通」とみなされる

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

かについて疑問を持つとすること

- ・ 共感する：他者の視点を取った見方をしたり、他者の思考や感情について想像できること
- ・ 肯定的な感情と同時に否定的な感情を同定し、それを態度・知識と関連付ける
- ・ 曖昧さに耐えること：異なる文化に属する人は異なる信念や価値体系を持っているために、ある状況に対する視点や解釈には様々なものがありうることを認めること。

知識・スキル

- ・ 他者についての知識を持っている。相手がどのような人であり、なぜここにいるのかを知ること。
- ・ 知識を発見する：質問したり、情報を探したり、それらの知識をリアルタイムの会話で運用することによって、他者についての知識を発見する。
- ・ 解釈し関連付ける：人や場所や物事について、自分の知っているものと比較することで、類似性と差異を意識すること。
- ・ 自分の想定や先入観、ステレオタイプや偏見に気が付き、意識すること。

行動

- ・ フレキシブルであること：自分の行動を新しい状況に適応させ、他者が期待するものに適応させること
- ・ コミュニケーションの方法に注意すること：違う言語でも、同じ言語を話していても、話し方やコミュニケーションに異なる方法があることを認識すること

行為

- ・ 行為を起こす：上記のすべての結果として、他者と関わり、物事を変えてよくするために行動をとる意思を持ち、行動をとれること。

2. においてみた質問群は、それぞれ上記の異文化間能力モデルに対応するものである。すなわち、質問 2. で、他の人を挙げることには、他者のアイデンティティを認知するという意味がある。また質問 4. で、相手の感情について考えるのは、曖昧さに耐える力と、他者性の尊重につながっている。異文化間接触においては、相手の感情をはっきりと確かめることはふつう、できない。むしろ我々は、相手の感情を簡単に推し量ることができないものを異文化間の出会いと感じるのである。それについて考えることは、誰も答えを知らない問いを考えるという、曖昧さというフラストレーションに耐える力を育成する機会となる。さらに、本心を知りえない相手について、その気持ちを考えることは、他者性を尊重することにつながっている。次に質問 5. では共通点、差異について記述させるが、これは共感性 (Empathy) の育成に関わっている。共感とは、共通点を見つけるだけではなく、差異を意識化し、それを認めることで得られるものである。さらに質問 6. は、コミュニケーションへの気付き、知識に関連する。質問 7. でその他の発見を聞くのは、発見知識を問うている。また、質問 8. 理解するために比較するのは、解釈と関連付けのモデルに関連している。さらに、質問 9. 振り返って未来を見るのは、批判的な文化的

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

気づき、行為の志向性を問うものである。

フランス語教育における『自伝』の意義

フランス語学習者のうち、「フランス文化を経験した」人とは、どのような人であろうか。まず想像されるのは、語学留学を経験した人や、文学や美術などのいわゆる高級文化を通してフランス文化を深い意味で経験する人ではないだろうか。しかし、このような学習者は、フランス語を学んだことのある人のなかでも、おそらく少数派であろう。

では、初級レベルにとどまる外国語学習においては、文化の教育は必要ないと言わなければならないだろうか。ここで、なぜ外国語を学ぶのかという問いに立ち返る必要があるだろう。複言語主義を推進する欧州では、外国語教育の意義は、単にコミュニケーション・スキルを身につけるというだけではなく、社会政策的な側面もあるということが論じられてきている。すなわち、外国語教育の明確な目標として、異文化間接触に備えるための教育を行うことが必要と考えられている。

フランス語の中級以上の能力を身につけることを目標としていないフランス語学習者に、フランス語を通して文化の教育が可能であるならば、異文化間教育がその答えの一つではないだろうか。学習者が将来フランス語を通して文化を学習するとすれば、それはその学習者にとって異文化間接触に他ならないのであり、フランス語教育はその準備のための教育を提供するだけの十分な理由を持つと考える。

文脈化の課題

この『自伝』は欧州で開発されたものであり、そもそもフランス語版と英語版しかないという点で、日本において用いるには、それなりの文脈化が必要である。さらに、この教材自体が、どのような環境でも用いることが出来るよう、「脱文脈化」されたものでもある。日本の教育環境において用いるには、これを欧州の文脈から「脱文脈化」させるのと同時に、具体的な教育現場へと「文脈化」させるという、二つの仕事が必要になってくるだろう。

参考文献（すべてサイト上にある）

Autobiographie de Rencontres Interculturelles :

http://www.coe.int/t/dg4/autobiography/default_FR.asp?

European Language Portfolio :

<http://www.coe.int/t/dg4/education/elp/>